
わたしの放課後梅雨前線

一河善知鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたしの放課後梅雨前線

【Nコード】

N1337C

【作者名】

一河善知鳥

【あらすじ】

梅雨のじっとりしたいやな空気。でもわたしは彼の姿を見つけてしまった。

「あ、これ僕のや」

アツシくんが無邪気に言って取ったのはピンクのビニール傘で、本当はわたしのだった。だけどわたしは

「それ、わたしのやつやで」

と取り返そうとは思わなくて、むしろやった、と思った。だってわたしはちゃんと名前を書いている。取っ手の部分に名前を書いている。だからそれにアツシくんかアツシくんのお母さんとかが気がついて翌日にアツシがわたしに「ごめんな」って話しかけてくれるかもしれない。一瞬でそこまで考えて傘をさして校舎をでていくアツシを見届けた。

学校は突然の雨のせいで、いつもいる六年生もサッカーをしないので帰ってしまったからかすごく閑散としている。昇降口には先生もいないし、雨のざあーと湿った空気があるだけだ。

さてさてアツシくんは傘を持っていかれてしまったわたし。目の前は雨の校庭。どうやって家に帰ろうか？

「傘、僕のちやうかった」

心でわたしのあほー、と思ってしゃがみこんでいるとそう聞こえてきた。顔をあげるとアツシくん。目がぴったりあって、ああ、顔が熱くなってもた。

「松下さん」

「え？」

急にわたしの名前を呼ぶからわたしはまともに答えられない。口からでた「え？」は「なあに」と聞き返すようなものではなくて「なんやそれ」とやたら驚きに満ちたものだった。

「傘、ないん？」

だけどアツシくんは気にせず続けて聞いた。よくみると右にわたしの、左にはまた違う傘を持っていた。

「傘な、今、門のところで守衛さん貸してくれはってん。あ、でもこれで最後言うてたなあ…」

「アツシくん二本あるやんけ」

「…これ僕のちゃうねん」

そう言うのアツシくんはわたしの傘をまたもとの場所に戻した。持ち主はここにいるのに。

「松下さん、どないするん？」

「どないもこないもそれ―…」

「二人で使こて帰る？ やっぱ誰かの傘黙って借りるんは悪いで」

「わたしのや」って言う前にアツシくんが言った。言ってもた。

目眩がして落ち着くために一回小さくため息をしてから改めてアツシくんを見ると、今度は傘に名前が書いてあることがどうかバれないようにと願うわたしに気づく。

「相合い傘せなわたし、帰られへんわ。ほんまはいややけど」

「もうみんな帰ってるさかい、誰も見いひんて」

「ほんならアツシくん、絶対内緒やで。言うたら絶交や」

「言わんて、ほんまに」

「ほんなら指切りしよーや」

「ええで」

わたしの出せる勇氣は全部出しきって、たった十秒間だけ、指の先っちょだけ、アツシくんと繋がった。

ごめんね、ピンクのビニール傘。なんて心で言って、わたしはわたしの小指をぼうつと眺めながら歩幅を合わせて雨の中を進む。

水溜りにぴったりくっついたわたしたちがぼんやり映っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1337c/>

わたしの放課後梅雨前線

2010年10月10日03時17分発行